

平成29年度がんサバイバーシップ研究助成金（一般研究課題）

研 究 報 告 書

（年 間）

平成30年8月21日

公益財団法人 がん研究振興財団

理事長 堀 田 知 光 殿

研究施設 筑波大学大学院人間総合科学研究科

住 所 東京都文京区大塚3-19-1

研究者氏名 松井 豊



（研究課題）

若年がん体験者のがん罹患が恋愛及び結婚に及ぼす影響について

平成29年7月28日付助成金交付のあった標記研究課題について研究が終了致しましたのでご報告いたします。

1. 背景

若年成人（本研究では診断時 15～39 歳）は、全がん患者に占める割合は 2%～3%（国立がん情報センターがん情報サービス，1985～2012 年）であるが、就学、就職、恋愛、結婚、妊娠、出産などの重要なライフイベントが、がんの診断や治療と重なる時期でもある。

近年、本世代に関するテーマへの関心が高まっているが、若年のがんに関する動向を報告した丸（2013）によると、本世代に特化したデータは限定されており、心理社会的問題については、看護・心理・社会学領域でもまとまった対象者への調査は実施されていない現状にある。さらに、丸（2013）は、我が国では、文化的特徴として家族の影響が大きいと考えられ、日本独自の視点での調査の必要性を指摘している。

2. 目的

本研究の目的は、若年がん体験者のがん罹患による恋愛及び結婚への影響の実態及び影響を規定する要因とその影響の結果生じる心理的現象との関連を検討することである。

なお、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 方法

がん診断時に 15～39 歳かつ未婚で、調査時に 20 歳以上 45 歳以下の若年がん体験者 219 名を対象に、web 調査を実施した（調査期間：2017 年 11 月 13 日～12 月 6 日）。調査項目として、同一選択条件のがん体験者 26 名を対象として実施した面接調査結果に基づいて作成した「がん罹患による恋愛・結婚に対する影響」（9 項目 5 件法）及び抑うつ・不安を測定するため、「K6」（Furukawa, 2008）を使用した。解析は変数増加法の重回帰分析によって実施した。

4. 結果

複数の調査項目のうち、本研究の目的であるがん罹患による恋愛及び結婚への影響及びその影響の結果生じる心理的現象のみを以下に論述する。

4.1 有効回答者

調査に回答した 220 名のうち、「あなたが診断されたすべてのがんの種類を教えてください」（複数選択）の問いに、すべてのがん種を選択した 1 名を除外し、219 名（男性 62 名、女性 157 名）を調査対象者とした。

4.2 がん罹患による恋愛・結婚への影響

「がん罹患による恋愛・結婚に対する影響」9 項目を 5 件法で回答を求めた結果を表 1 に示す。

がん罹患による恋愛・結婚に対する影響で最も多かったのは、「再発への不安」（53.9%、「強く影響した」と「やや影響した」の合計。以降同様）であった。次いで、「子供ができないこと・できないかもしれないこと」（52.6%）、「がん罹患による自分に対する自信低下」（49.3%）の影響が大きかった。

表 1 がん罹患による恋愛・結婚に対する影響 (5 件法、N=219、単位：%)

	ま っ た く 影 響 し な か っ た	あ ま り 影 響 し な か っ た	や や 影 響 し た	強 く 影 響 し た	左 記 の 変 化 は 生 じ な か っ た
1 がん治療による外見の変化(脱毛、傷跡、顔色、その他)	13.7	20.1	16.4	21.0	28.8
2 がん治療の副作用	15.1	17.4	21.5	18.7	27.4
3 子供ができないこと・できないかもしれないこと	10.5	12.3	24.7	27.9	24.7
4 長期の入院・闘病生活	17.4	23.7	18.3	12.3	28.3
5 再発への不安	9.6	20.5	32.9	21.0	16.0
6 がん罹患による失業	14.2	23.7	16.9	11.9	33.3
7 がん罹患によってパートナーと別れた知人がいたこと	16.9	14.2	15.1	8.7	45.2
8 がん罹患を受け入れてくれなかった友人・知人(性別を問わず)がいたこと	14.6	12.8	18.3	9.1	45.2
9 がん罹患による自分に対する自信低下	11.4	14.6	25.6	23.7	24.7

4.3 がん罹患による恋愛及び結婚に対する影響と心理的現象との関連

がん罹患による「恋愛・結婚に対する影響」は、「調査時年齢の低さ」、「男性」、「抗がん剤治療歴あり」と有意な正の相関を示した ($p < .01$)。また、「恋愛・結婚に対する影響」の大きさと「K6」との間にも有意な正の相関が認められた ($p < .01$)。

5. 考察

若年がん体験者のがん罹患による恋愛・結婚への主な影響は、「再発不安」、「妊孕性の問題」、「自信低下」であり、影響が大きかったがん体験者ほど、うつ・不安などの精神的不健康症状が強かった。これらの影響は、女性と比べて男性のほうが大きかった。男性のほうが恋愛・結婚への影響が大きかった要因として、「がん罹患による恋愛・結婚に対する影響」の調査項目には、妊孕性の問題が含まれており、直系の跡取りを重視する我が国の考え方を男性がより強く意識していたことが考えられる。また、本世代の男性のがん罹患率は女性に比べて低く、男性が利用できるサポート源が少ないことも考えられる。

6. 今後の課題及び計画

本研究では、がん罹患による恋愛・結婚への影響が特定され、これらの影響が大きいほどうつ・不安が強いことが明らかとなった。今後は、否定的な影響に対処するサポート、コーピング方略、心理的介入などの検討が必要である。

また、がん体験者本人だけでなく、周囲の人々や社会全体を対象に含む、がんサバイバーシップの観点から、がん体験者を受け止める社会の側への働きかけも重要と考えられる。がんに関する教育や普及啓発活動を行い、評価する仕組み作りが必要である。

なお、本研究の面接調査結果は、第 56 回日本癌治療学会 がん患者・支援者プログラムで発表し、その後論文化する。また、量的調査結果は、平成 30 年度に発表及び論文化する予定である。

7. 引用文献

Furukawa, T. A., Kawakami, N., Saitoh, M., Ono, Y., Nakane, Y., Nakamura, Y. ...Watanabe, M. (2008).

The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan.
International Journal of Methods in Psychiatric Research, 17, 152-158.

国立がん研究センター（1985-2012年）.罹患データ（高精度地域の実測値） Retrieved from
https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/dl/index.html#incidence

丸光恵 (2013). 思春期から若年成人期のがん患者・サバイバーをめぐる諸問題. 札幌保健科学雑誌,
2, 1-10.